

研究成果展開事業
共創の場形成支援プログラム
(COI-NEXT)

育成型

終了報告書

「ネオ・ディスタンス社会を創造する
次世代「光」共創拠点」

プロジェクトリーダー	氏名	野地 澄晴
	所属機関	国立大学法人徳島大学
	部署	
	役職	学長

2022年4月

1. 拠点ビジョンの作り込み

本プロジェクトでは、SDGsのターゲットである「健康・医療(SDG3)」「技術革新(SDG9)」「まちづくり(SDG11)」「つながり(SDG17)」からのバックキャストと、徳島といえばノーベル賞を輩出した光(LED)と言われる特色と強みのある分野により、ポストコロナ社会に求められる距離に対する新たな価値観(ネオ・ディスタンス)を備えた社会像を目指し、“「ネオ・ディスタンス社会」を次世代「光」で実現”を拠点ビジョンとした。実施期間においては本格型への昇格に向け、特に下記3つの取り組みに注力し、ビジョンの再検討・ブラッシュアップを行った。

1) 徳島で活躍する若者からのヒアリング

高い社会課題意識を持ち徳島で活躍する複数の若者に、個別ヒアリングを行った。ヒアリングからは、社会を本気で変えたいという熱意とともに、地域活動に際しての障壁(不寛容な社会)等の示唆が得られた。ヒアリングから得られた社会課題に関する示唆は、後のワークショップの課題設定にも反映させた。

2) 多様なメンバーが参加するアイデアソンワークショップの開催

徳島大学では、国立大学初のフューチャーセンター「A.BA」を活用した未来志向のワークショップに取り組んできた実績がある。さらに、地域の未来に対し強い課題意識を持つ若者、多様なバックグラウンドを持つステークホルダー24名を集め、先進的な課題を解決するためのアイデアソンワークショップを開催した。ワクワク感に溢れた活発な議論の場からは、社会課題に関する振れ幅の大きい様々なアイデアが生まれ、参加者の満足度も非常に高いものであった。

3) 参加者へのフォローアップ、コモンランドの作成、拠点ビジョンの共有

アイデアソンで得られたアイデアを基に、新たな参加者らとオンラインワークショップ形式によるコモンランドの作成、複数回の個別ヒアリング、時間をかけた徹底的な議論(137回)により、拠点ビジョンの作り込みを進めた。

これらの活動により参加者全員にとって心から解決したいと願い、やる気の出る拠点ビジョン『場所、年齢、相手を問わず、想いが尊重され可能性を発揮できる、ネオ・ディスタンス社会を世界に広げていく』を設定した。

2. 拠点ビジョンからのバックキャストによるターゲット・研究開発課題の見直し

拠点ビジョンのブラッシュアップを進める中で、「地方では都市部とは異なり、成長や価値創造のきっかけ、学習機会に恵まれにくいこと」、更に、「テクノロジーの進歩によって長寿化が進展している現代社会は人生100年時代と言われているが、超高齢化(長寿化)の進展の恩恵に浴するには、寿命の延伸とともに健康寿命も延伸していかなければ謳歌はできないこと」、また、「多様性に対して不寛容な機運が、新たな挑戦への足かせとなり、芽を摘むこと」等の気づきを得られた。これら社会課題と拠点ビジョンからのバックキャストにより、新たなターゲットとして「どこでも成長しながら価値創造できる」、「いつまでも人生100年時代を楽しむことができる」、「誰とでも思考・感情を共有することができる」を設定することができた。

新たなターゲットの設定を経て、申請時の「ナノ・プラズモニック増感型フォトニック・バイオセンサーの開発と高付加価値血液診断への応用」(研究開発課題1)、「Beyond 5Gに向けたオール光型テラヘルツ通信技術の開発と応用」(研究開発課題2)に加えて、「どこでも価値創造ができ、誰とでも思考・感情を共有できるツール」のための新たな研究開発課題の拡充を進めた。さらに、これら研究開発による成果のグローバル展開を視野に入れ、他の共創の場拠点との連携を深めた。

3. 運営/研究体制とマネジメントの仕組み構築（持続可能性の具体化含む）

育成型への採択後の早期に、本プロジェクトを運営する事務組織（共創の場プロジェクト推進担当課）並びにURAを配置し、参画機関等とともに、拠点ビジョンの見直し、参画機関との調整、持続可能な共創拠点の体制についての議論を重ねてきた。本拠点は、代表機関である徳島大学の学長が拠点運営機構の設置責任者とプロジェクトリーダー（PL）を兼務する体制を取っており、学長指揮の下、学内アセットを適宜投入する体制を活動の核とし、ビジョンの策定から事業化に至るまでの過程を一体的に運営していくこととした。その後、拠点設置責任者である学長の全面的なバックアップを元に、拠点ビジョンの見直しに合わせ、複数の地域のステークホルダーを巻き込み、「地域課題解決のための共創実践とオープンイノベーションを活性化させる」ことを長期ミッションとして取り組む運営体制とした。このミッションは、令和4年度から始まる、徳島大学としての第4期中期目標にも取り入れ、大学の長期持続的な取り組みとして設定した。

4. 研究開発課題の成果

研究開発課題1

「ナノ・プラズモニック増感型フォトニック・バイオセンサーの開発と高付加価値血液診断への応用」

本研究開発課題では採択当初に設定した目標1-1「ナノ・プラズモニック増感型フォトニック・バイオセンサーの高感度化（イムノクロマト法の100倍）」および目標1-2「ナノ・プラズモニック増感型フォトニック・バイオセンサーの簡便化（イムノクロマト法と同等）」について、概ね当初の計画通り進めることができた。

研究開発課題2

「Beyond 5Gに向けたオール光型テラヘルツ通信技術の開発と応用」

本研究開発課題では採択当初に設定した目標2-1「オール光型テラヘルツ波発生・検出法の開発」および目標2-2「オール光型テラヘルツ通信の原理検証実験」について、概ね当初の計画通り進めることができた。

5. 今後の活動について

本プロジェクト実施期間において、共創の場の拠点形成に重要な要素の一つが「多様なバックグラウンドを持った多くの人材が高い熱量を持って参加すること」であること、そのためにはワークショップも有効な方法であることが認識された。そこで、ファシリテーター、研究や企業での製造開発・知財管理への従事歴を持つ人々を雇用する共創の場人材のプールを作り、高い社会課題意識を持ち活躍する多数の若手人材の巻き込みを具現化する場を形成していく。

産学共創拠点の形成に向けて、拠点ビジョンと研究開発課題の紐づけおよび、グローバル展開の道筋が明確に示せなかったことが顕在化した課題として挙げられる。この解決のため、徳島大学の持つ強みや特徴を活かしつつ、グローバルな視点からの社会課題・ニーズに基づいた徹底的なバックキャストによる研究開発課題の設定が必要である。加えて、グローバル人材の参画、海外拠点や他の共創の場拠点との連携等を図り、拠点ビジョンに共感する研究者・企業・自治体等を巻き込み、持続的に共創の場拠点活動を発展させていきたい。